

10a 当り、何んと23トンもとれた！

沓名(くつな)さんのキュウリ長期栽培のコツ

高原 純子

キュウリのお化けが

首根っこを掴むのではないかと？

“CDU化成と燐硝安加里を使って長期(ハウス)栽培で、キュウリを23トン穫っている精農家が安城市にいるそう。今度はそれを取材するが、君にメモをとって貰う。現地行きは7月1日。”編集主幹の命令だ。

10a 当り23トンという数字にも驚いたが、“メモをとるからにはそれを纏めてみろ”という話には参った。そう弱い方ではない？筈の心臓がドキドキ波を打った。

雑誌編集にズブの素人(しろウト)という訳ではないが、肥培管理の問題で現地へ赴くなどは今回がはじめて、“ああ、もっと勉強しておくんだっ…”と悔んでみたり、この頃ようやく覚えた幾つもの熟語が走馬灯のように現われたり消えたり、キュウリのお化けが私の首根っこを掴むのではないかとも思ったりした。

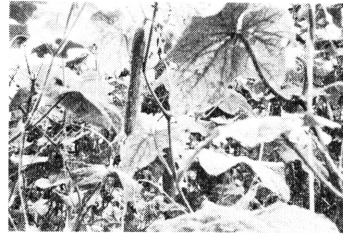
しかし主幹も一緒だとあれば、“最悪の場合には手を貸して呉れるだろう…”と割り切って、7月1日の早朝、東京を発って名古屋へ向った。

懸念された雨は、私達が名古屋に到着する前に上って、月替り7月1日の名古屋の朝はさすがに良かった。名古屋営業所で松村所長以下皆さんにお目にかかり、小休止ののち、近本さんの車で国道一号線を一路安城市へ向った。

名古屋を出て間もなく左側の車窓近くに「愛知県経済連」の看板が見えたのはいいとして、その下に「中古車センター」と書かれてあるのを見て、思わず“あら、経済連では中古車まで販売してるんですか、”と頓狂な質問をして、トタンに顔がはてるのを覚えた。

“経済連というところは、農家の必要とするものは何でも揃えているのです。農業流通機構上から見るとちょ

うど「商社」のような役割を果しているのです。それに愛知県は豊田市を控えているので、中古車も手がけているのでしょ…。”と、囁ん



ハウスいっぱい
美事なキュウリが…

で含めるように近本さんが説明されたからである。

笠寺、大府、刈谷を過ぎると、目指す安城市は指呼の間にある。東海道線のガード下を

抜けると間もなく、自動車は西三河農業技術センター安城分館に到着した。先着していた西三河地区担当の加藤さんが“よう”と手を振っている。

安城市周辺の洪積台地安城ケ原は古くから水不足に悩んでいたが、矢作川(やはぎがわ)に水源を求めた明治用水が開通してから、ここ西三河一帯の地は広く潤ったという。明治13年頃のことだそう。

安城市はその安城ケ原の中央にあり、人口約6万、面積65.2km²。米麦のほかハクサイ、キャベツ、メロン、リンゴ、ナシ、養鶏など、古くから多角的経営をとることで知られている。とくに大正末期からは協同組合思想と組織を巧みに活用して規模拡大をはかり、「日本のデンマーク」というにふさわしい農業都市である。

農業技術センターの4階にある愛知県経済連安城支所では、農産課長の鈴木さんに来訪の挨拶をし、辞去しようとする課長は

“東京からわざわざご苦労様だが、どうか長期栽培の特性と23トン穫りの腐心談をよう聞いてって呉れや。”

と声をかけながら、出かけて行かれたが、鈴木課長の呼びかけで、幾らかゆるみ気味だった私の気持ちは再び引締った。

ここからほぼ100mの距離に安城税務出張所があり、その3階に安城農業改良普及所がある。私たちは現地へ向う前に、まずここでキュウリの長期栽培に関するレクチュアを受ける必要があるということで、反転して安城農業改良普及所へ向った。

1つの作物にしぼって

長期に栽培した方が遙かに有利

“やあ、ようおいでななあ、さあさあここは暑いで、上着もとって…、あっちゃ行きましょ…”と伊藤所長



西三河農業技術センター
安城分館 正面

は私達を会議室に案内され、あらためて“今日は暑いであらも…”

会議室の窓が開けられ、一同ホッとしたところへ、キュウリの長期栽培の指導主任である黒柳さんが、日頃の活動に日焼けされた顔を見せられて、受講態勢は整った。

“施設園芸の経営には大体2つの方向があると思います。

①は、比較的小規模経営のなかで、周年栽培を行い単位収益を上げているもの。

②は、ひとつの作物を長期にわたり栽培することで収益を上げているもの。

①の場合は、いろいろなものを、輪作体型で、組合せを行う（これはプラスの面であるかも知れないが）ために、規模拡大には限度があります。しかし②の場合はたとえばキュウリならキュウリと、作物を単一化するため、労力的にも問題がないし、第一、栽培の省力化ができますから規模拡大も可能な訳ですね。もちろん当地のキュウリにも普通型栽培が無い訳ではない。しかし、3年前からハウスキュウリの長期栽培の試験栽培を試みたのも、要は何とかして、これまでの古い経営型態から脱却できないかという事にあった訳です。”

“作型はご覧のとおり（と、図を示しながら）で、何しろ11月から翌年8月まで収穫でき、従来のハウスキュウリに比べ約4カ月長く収穫ができるが、反面、ある程度経営的に成り立つ保証がなければ意味がない。と同時に、栽培技術、栽培労力もごく容易なものでなければ致方ない訳ですね。銚んじ詰めれば品種、肥培管理を思いきって変えてみる事が、収益を上げる決め手じゃないのか…とね。”

<参 考>

圃場準備 ・圃場は排水が良く肥沃な場所を選び、ビニール張りは早目に行う。

- ・稲ワラ2,500kgを切り全面施用する。
- ・栽培面積にあった灌水施設を考える。耕起砕土を充分行い肥料の分解を計る。

“そのための試験展示圃の設置などについては、有難いことに良い協力者を得ました。匿名（くつな）さんと云いまして県農業経営士であり、安城市農業協同組合のキュウリ部会長をやっている方ですが…、過去3カ年の試験結果、効果が認められ、作型も確立され、普及の段階に入ってきたところであります。”

C D U 化成と燐硝安加里で

肥培管理体制は充分だ

しかし、この長期収穫法が確立するまでに、決して問題が無かった訳ではない。

“まず1、2月にどれだけ収穫できるか、厳寒期の地温をどのようにして、20°C以上を確保するか、またその可能性があるかどうか—それが増収の決め手になる訳です。そこでいろいろ考えた結果、室内暖房機を使いまして、地上部と地下部を暖められないかと考えました。これはうまい工合にいきました。ダクトを地上部、地下部両方に通して熱風を送るんです。これだと設備費が約4万6千円くらいで済みます。”

“次の問題は光線です。これは少なくとも3万から4万ルクスの光線が欲しいですねえ。過去3年間は、子づるを直立に誘引していたんですが、葉が繁茂して下部に光線が通りにくい、勢い側枝の発生が抑制されて、中間6節から10節には発生しないということになってしまいました。そこで扇型になるように誘引方法をかえたところ、採光・通風も良くなって、この点は良い按配に解決しました。”

“最後の肥培管理の問題です。何しろ8カ月以上にわたって収穫しますから、施肥については十二分の注意が必要です。つまり、元肥として長効きのする緩効性窒素肥料が必要な訳で、C D U 化成もこの意味から使ってい

- 育苗床準備 ・くん炭作成の際は焼きすぎを避けるため、稀硫酸（3.000倍）で洗い、くん炭1ℓにつき過石1gを入れると良い。
- ・培養液を灌水するのでベッドの高低には充分注意する。
- ・もみから燻炭には充分培養液を与えておく。

キュウリの長期栽培体型

月 別	9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
栽培型																								
夏系きゅうりの長期栽培	は種 定植 主枝ピンチ つぎき鉢あげ 暖房開始 収 穫 期 暖房終り																							

ます。と同時に収穫が長期にわたりますから、濃度障害を起さないように追肥を重点的に行い、灌水と同時に硝酸安加里 S 604 を水に溶かして定期的に液肥として施用していますが…。どうですお宅でも液肥を製造して呉れませんかね……。”と、思わぬところで黒柳さんから注文が出た。

と、それまで黒柳さんの話を黙って聴いておられた所長の伊藤さんが、思い出したように“東京の八百屋さんの店頭に出ているキュウリは“白イボ”ですか？“黒イボ”が多いですか？”と、女性とみて私に訊ねられた。

はて、どちらだろうか？台所に立って“もろぎゅう”を作ろうとする場面を想像するのだが、どうも“白イボ”も“黒イボ”も浮んでこない。

“白イボが多いように思いますが…”と自信なげに答える私に伊藤さんは

“白イボの方が身(み)が柔らかくて美味しいとされています。これは夏とれるキュウリなのです。高く売れるし、それで夏系キュウリを長期に栽培するという事になった訳もその辺にあるのですが、名古屋、大阪などの市場では特に白イボでなくてもよいので“白イボ”を出荷して思わぬ安値で仕切られることもありましてなあ…”と云って一同を笑わせる。

“細かいことは現地で見ても載くとして、どうだね加藤君出かけるか？…”と、黒柳さんが加藤さんに声をかけた。

現地とは先に述べた沓名嘉吉さんのハウスのことだ。が、その前に、どうせ途中だからというので、市内安城町にある安城農業協同組合の「総合センター」(6万haの敷地内に、各種農業用施設や倉庫などが建てられている)を訪問して、営農部資材課長の太田さんにお目にか

かる。私たちが寄った事務所の向い側にあるのが、3千万円を投じたというご自慢の大撰果場である。

“なあーんだ、土曜日だというのに、まだウロチョロしとるのかいな？”

“僕(わし)の稼ぎが悪いもんだで、ご覧のとおり

皆んなにまで迷惑をかけるときに…。アハ…”

こんなやりとりが、天井の高い鉄骨の事務所に響く。

“どうせ後で寄せて貰うけど、では沓名さんとこへ行くてくるわ…”と、黒柳さんの案内で、私たちは今日の取材の本命「沓名嘉吉」さんのハウスへ向った。

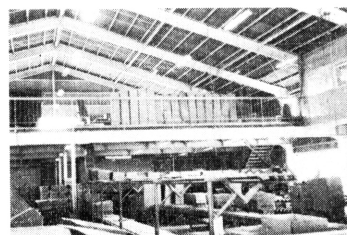
規格の整理を断行して

売上げは前年比 102%になる

“そうそう、それを左へ入って…、ここや。”車をおり門をくぐると、作業衣姿のおじさん？が私たちを見かけると元氣よく“暑いに、ようおいでたなあも…”と挨拶された。沓名さんである。

キュウリは既に大正年間から手がけられ現在は常備(女子)1人と夫妻の3人で30aのハウスを経営し、安城市農協のキュウリ部会長のほか愛知県農業経営士でもある。

戦後は21年復員後からまたキュウリに手をつけたが、23年頃は温床紙、27年ビニール、ハウスは30年と次第に栽培態様が変わりつゝあるが、“どういうもんかね、キュウリの値段は今もその頃と殆んど変っちゃおらんよ”と苦笑される。



2段建の立派な安城農協の選果場

育苗床管理 ・播種後発芽までは、昼夜とも27°C～28°Cに保ち、発芽後は徒長しないように換気に注意し、夜温は15°Cくらいになるように注意する。

・接木(台木=南瓜)後は、側枝の発生をうながす管理をし、本葉3枚までは昼27°C、夜温18°C～20°C前後の温度を確保する。

・培養液は深さ2mくらいとし、蒸発散に応じて、ベットの底が現われたら培養液を補給する。

・苗の生育に応じて鉢間隔をひろげる。

本圃の準備 ・元肥は早めに、有機物を充分施用する

・定植前5日～7日前に充分灌水し、1m巾のポリマルチを行う。

・定植前にカーテン式二重張りを準備する。

・栽植本数1,200株(2本立)

本圃の管理 ・定植は本葉3枚の若苗を早目にする。

・くん炭育苗なえは、株元が乾燥しやすいので特に注意し、株元を重点的に灌水する。

・定植後は子づるを早く出させるために、やや高温むしぎみにする(昼27°C～30°C、夜温15°C～18°C)

・整枝は、親づる5枚で摘芯し、3節より上で子づる2本を上へ伸ばし、1～2節より出る子づるは横に出し5～6節でピンチする。上に伸ばした子づるは、葉数にこだわらずに150cm～160cmでピンチする。

・温度管理は子づるピンチまでは、やや高温とし孫づるは伸長側枝とし、ひこずるが退化側枝となるように管理する。

・日中できるだけ光線の当るようにする。光線が不足すると成もどりや側枝の出方が悪くなるので、生育期間中を通じて光線が株元に当るよう管理する。側枝の葉が主枝の葉と同じ位になった時に、主枝の葉を摘葉する。



キュウリ部会長の沓名さん

さ。10本入りの木箱を振り分けにしたうえ、片手に1箱抱えて市場へ行けば、千円頂戴でき大気分で帰れたもんだで…。アハ…。”

“ホレあなたの横の柱（と、私の横の柱を指して）これが1本100円。キュウリ1本が30円だから3本あれば桂が買える勘定になる。これもその頃に建てた家だでよ…。”

1本30円のキュウリに何んと値うちがあることだろう。何んだか私も農業をやりたいなくなった。

“今年の収量？まあ30aで70t、10a当り23tとして粗収入212万円、生産費を約50万円とすれば150～160万が手どりという勘定になるが、儂らは指導の先生方の云われるとおりにやっとなだけじゃがなあ。”

“市場の成行は、ええとこ去年のほぼ90%というところらしいが、安城では今年から等級を「秀」と「並」の2本建にしぼって出荷することにしたため、下限がこれまでよりグッと上り、昨年比102%ということになったげな。kg当り7円高としても、20tとりなら14万円も儲かることになるわな。”

農業経営士、キュウリ部会長の慧眼（けんがん）に狂いはなかった。

“チッソ会社の肥料？いいよ、本当にいいよ。イヤこ

“とに角23年頃は儲かったの。もっとも食いは幾らでも欲しい時代だったでなあ。とに角キュウリ1本30円に売れるのだからたまらんわ

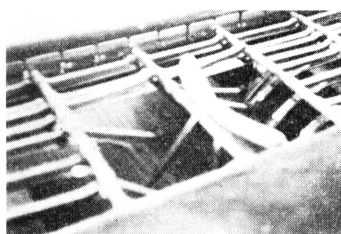
れは世辞ではない。特に元肥としてのCDUは葉を過繁茂にする心配がないから、よく光線が当る…”

“それに、これは儂の持論じゃけど、人間は毎日食事をするやろ、キュウリだって毎日食事がしたいと思うのや。そこで追肥をな、できれば毎日やりたいと思う…。そこまで考えてやらなあ、キュウリが可哀そうやで…”

消費者生活を潤すとともに、生産農家の経営内容を向上するのが沓名さんの悲願であり、そのためにキュウリの価格の追跡調査をやったり（前述の規格整理はその結果でもある）、1日8時間労働をモットウとしている。

沓名さんのお宅を辞去して帰途、安城市農協の撰果場に立ち寄った。

3千万円の巨費を投じて43年に完成した大撰果場（安城広域集荷センターとして、安城、刈谷、地立の3市のものがここに集荷されてくるもので、常時35～40人のパートを雇っている。）土曜日の午後とあって休止していた機械を、ホンのチョッピリ動かして載いて、作動状況を見た。（写真参照）



キュウリの撰果機
長さで階級が決められてゆく

機械が動くときの上に乗せられてあるキュウリは「決った階級」のところにくるとカタリと落ちて、下のコンベアーに乗ってダンボール箱まで運ばれて行き、パッキングされるという仕組で、能力は1機1時間1tで全部で4機あるが、来年は2階の撰果場を拡大してナシの撰果は2階で行うようになるとのことであつた。

- 5月上旬以降は換気に充分注意し、昼夜共に開放する
- 追肥は樹勢に応じて行うが、灌水と同時に液肥として行う。
- 灌水は活着後はやや控めとし、収穫始めより重点的に行う。

- 6月以降の追肥については樹勢を充分考慮して多肥をさける。

施 肥 基 準

肥 料	種 類	全量	元肥	元肥	追肥
			①	②	
10a当り	稲 ワ ラ	2500K	2500		
	けいふん	500	500		
	BMようりん	100	100		
	マグカル	200	200		
N55.2kg	アズミン	40	40		
	CDU素	40		40	
P46.2kg	CDU化成 (14.8.12)	40		40	
K53.6kg	燐硝安加里 (S604)	80			80
	硝加安NK (18-0-18)	80			80
	硫 加	50	30		30

病虫害防除 • 土壤伝染性病害の予防として接木を行う。

• 対策として河川の水は使用しない。
• 菌核病および灰色カビ病の発生が多いから、マルチは完全に行う。

• 発病後の防除は効果が悪いから、病害の有無にかかわらず、定期的に薬剤撒布する。

• 発病を見たら2～3日おきに撒布する。

圃場の排水 • 特に黒ダネ南瓜は湿害に弱いので排水の悪い圃場については、周囲に排水溝を作る。

ハウスの整理 • ハウスはできるだけ移動しないようにし、収穫後は塩類濃度を下げるため灌水する。(15日)

• 灌水後病気予防のため土壌消毒を行う。